

1572年10月5日付、天草発、ルイス・デ・アルメイダの書翰

岡 美穂子

1 書翰の背景

現在、キリシタンの風習や伝統が残ることで有名な熊本県天草諸島であるが、イエズス会によるキリスト教布教が始まったのは、大友領豊後や松浦領平戸に比べるとやや遅く、1566年頃のことと、後述するように志岐が開始地点であった。さらにポルトガル人のイエズス会修士ルイス・デ・アルメイダからの依頼により、大友義鎮が天草鎮尚宛に領内のキリシタン庇護を求める書状を送ったことが天草キリシタン興隆の背景にある¹。この頃、天草鎮尚はその異母弟を含む家臣の謀叛に悩まされ、「自分の城の一つでわずかに生命を保っていた」ところ（フロイス『日本史』）、大友義鎮からの援助で劣勢から挽回した。当時の天草鎮尚の本拠は現在の天草下島南部の河浦にあった河内浦城と下田城であったが、この頃鎮尚は中央部の本渡城に籠城していた。イエズス会史料にある「天草Amacusa」が何処を指すのかについては、現地で長年の論争があり、一時的に鎮尚が拠点とした「本渡」であるとする研究者もいたが、イエズス会関係史料には「本渡」は《Fondo》と表記される。さらには1589年6月30日付アフォンソ・ゴンザレスの天草発書簡²ではその最後の発信地名に《cavachinovra》とあることから、《Amacusa》は河内浦を指したと考えると良いであろう。天草の河内浦は元々干潟で、江戸時代中期頃から埋立て・干拓が始まり、徐々に海岸線が変化した。したがって現在の一町田川河口一帯は海中であり、河浦一町田の集落は海に面した漁村であった。天草氏の居城の代表格は河内浦城であるが、川向かいの下田城も河内浦城と対で使用されたと考えられている。それ以外にも一町田の集落内に、平時の日常生活のため天草氏の居館があった等の情報がイエズス会史料に散見される。

天草氏領内がイエズス会の布教の中心地の一つとなるのは、宣教者養成機関であるコレジオが創設された1591年のことである。豊薩合戦から秀吉の天下統一の流れの中で大友義鎮が没し、九州北東部の大友氏勢力がおよそ解体されていく過程で、イエズス会も九州における布教の拠点を豊後から他所へと移す必要があった。1570年の開港で長崎が布教の中心地となったと思われるが、実際には大友義鎮の死（1587年）までは豊後が九州の、ひいては日本の最たる布教拠点であった。この頃、秀吉の構想の中では本州西端の良港である下関にポルトガル船を誘致し、イエズス会士たちをそこに常駐させる計画があったと筆者は考えている³。大戦国大名としての

¹ フロイス『日本史』第七卷（ソフトカバー）第32章（第1部93章）、1982年版、67～68頁。

² Archivum Romanum Societatis Iesu (ARSI), JapSin 51, f.112v.

豊後大友氏の消滅と秀吉の伴天連追放令（1587年）が重なったことにより、大友義鎮の庇護のもとに成長してきたキリシタン教団も安全な別の場所への拠点移動を迫られた。マカオからのポルトガル船が入港する長崎、キリシタンに改宗した有馬氏の領地である島原半島、同じく大村氏の領内、そして島原半島からほど近く、天草氏の庇護が受けられる天草下島南部等での活動が次第に盛んになっていった。

河内浦にコレジオが置かれ布教の一中心地となる1591年以前、天草下島で手始めに布教が開始されたのは北部の志岐鎮経（麟泉）の領地で、いわゆる「志岐」と呼ばれた一帯（現在の苓北町周辺）である。ポルトガル船の来航を切望する志岐鎮経の招きにより、アルメイダが志岐で布教を開始したのは1566年のことである。1570年にはイエズス会インド管区で正式に任命された布教長としてフランシスコ・カブラルが志岐に到着し、そこで日本に滞在するヨーロッパ人宣教師の大半を招集して宣教会議を開いた。ザビエルに伴って来日し、その離日後は実質的な日本布教長を務めていたコスメ・デ・トルレスはこの会議終了後に志岐で没した。つまり天草河内浦で布教が本格化する以前、志岐が天草下島の布教の中心地であったと言える。領主志岐鎮経には実子がおらず、有馬晴純の五男（志岐諸経）を養子に迎えていた。晴純は子に恵まれていたため、嫡男の義貞を残して、次男（大村純忠）、三男（千々石直員－ミゲルの父）を近隣他家に養子に出すことで、肥前における有馬氏の影響力強化を試みた。有馬氏は勢力、家格の点でも肥前一带では他家を凌ぐ名家であったため、大村純前（純忠の養父）は実子（後藤貴明）がありながらも、有馬家より迎えた純忠に家督を継がせた。志岐鎮経は一部の家臣や領民と共にいったんキリシタンに改宗したものの、間もなく領内で阿弥陀仏を祀る寺院を建立し始め、その建設作業に非協力的なキリシタンの家臣を弾圧し始めた。一方で、上方での布教活動に長年従事し、一時的に志岐を訪問したガスパール・ヴィレラの手で、1568年、約600人が改宗した⁴。修道士のミゲル・ヴァスの常駐は1570年頃から確認される。

天草氏支配地における布教は先述の通り、アルメイダによって始まった。とはいえ、九州の領主たちが宣教師を招来する目的は基本的には貿易活動の招致にあり、志岐鎮経改宗における失敗の経験もあって、天草鎮尚からの宣教師招来にはすぐには応じず、様子を見たことがフロイス『日本史』に詳述される⁵。

天草にとどまって布教を開始する前に、アルメイダは鎮尚から領民が自由にキリシタンとなることを許す旨を書面で用意させ、鎮尚の息子の一人をキリシタンにすることに同意させた。鎮尚の重臣に「リアン」という名の人物がいたが、天草領のキリシタンはこの「リアン」を頭に仰いだ。鎮尚の弟たちを報じる反抗勢力は仏僧たちと結託して「リアン」の殺害を試みたが、キリシタンが結束してリアンを守ったために不首尾に終わり、リアンの一族は島原の口之津に逃れた。その後、アルメイダの依頼により大友義鎮から天草鎮尚宛ての書状が何度か届けられ、鎮尚の権威が大友氏の後ろ盾で増幅したこと、本来は敵であった志岐鎮経が鎮尚に加勢したことなどから、反対勢力の鎮静化に成功した。鎮尚にとってこれらの利益は主にアルメイダが仲介する大友氏との関係性によってもたらされたものであったので、1570年ないしはその翌年に受洗し、ドン・ミ

³ 岡美穂子「銀の島日本に関する情報をめぐって スペイン・ポルトガルのアジア戦略」鹿毛敏夫編『硫黄と銀の室町・戦国』思文閣出版、2021年。

⁴ フロイス『日本史』第9巻（ソフトカバー）第17章（第1部72章）、1982年版、267～276頁。

⁵ フロイス『日本史』第9巻（ソフトカバー）第20章（第1部81章）、1982年版、307～325頁。

ゲルの洗礼名を得た。この時期の天草氏の内紛では、鎮尚への反抗勢力に島津氏、相良氏などが加勢していた。反乱が失敗して相良義陽の下に身を寄せた鎮尚の弟の刑部大輔は、1581年末の相良氏と阿蘇氏の重臣甲斐宗運との戦いで相良義陽と共に討ち死にした⁶。この時期の阿蘇氏は島津氏の勢力拡大に対抗するため大友氏と協力関係にあり、この相良氏と阿蘇氏の戦いは島津氏対大友氏の代理戦争の様相を呈していた。

2 書翰の内容と書誌情報

さて、ここで紹介する1572年10月5日付のアルメイダ書翰は天草（河内浦）を発信地とする最初のイエズス会士書翰で、通称『エヴォラ版 カルタス』⁷（1598年編纂・刊行）には収載されないため、本邦で翻訳されたこともない。

天草下島で最初に発信されたイエズス会書翰は『キリシタン文庫』のカタログに拠れば1566年10月20日付け、志岐発のアルメイダ書翰⁸で、これは編纂時に大幅に内容を改変されて『エヴォラ版 カルタス』に収載されているため⁹、一応翻訳も存在する。その後志岐での布教に投入されたイルマンのミゲル・ヴァスによる書翰3通（1568年¹⁰、1570年10月12日¹¹と1571年10月18日¹²）が記され、いずれも『エヴォラ版 カルタス』に翻刻されているため、日本語でも内容を知ることができる。

筆者が確認した限り、志岐、天草、本渡といった天草下島を発信地とするイエズス会士の書翰は45通あり、その内訳としては志岐発が16通、天草発が28通、本渡発が1通である。うち「日本」あるいは「日本のコレジオ」を発信地として書かれ、内容から天草発信と確認できる書翰が3通ある。これらのうち、『エヴォラ版 カルタス』に全文または一部が翻刻され、日本語でも読むことができるのは、5通のみである。したがって残る40通に記される天草の情報はまだ日本では知られていないとも言える。

先述のように、天草鎮尚の本来の居城であった河内浦で初めてイエズス会士による書翰が記されたのは、1572年10月5日のことで、アルメイダによるインド管区長アントニオ・デ・クアドロス宛てのものであった。ローマのイエズス会歴史文書館の日本・中国関係文書（JAPSIN）のカタログを収載した『キリシタン文庫』ではこの書翰のポルトガル語文が3通、イタリア語訳文が1通確認されるが¹³、いずれも直筆書簡ではなく同時代写本である。先ほど述べたように、天草下島発のイエズス会書翰はその大半が本邦では内容が知られていないことに鑑み、少しずつではあ

⁶ フロイス同右、324頁。

⁷ *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa*, Evora 1598. 網羅的に翻訳したものとして松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』同朋舎があるが、オリジナルの編纂時に多くの記述が改変、削除されている上、翻訳者による誤訳も多いという問題を含むものである。

⁸ ARSI, JapSin 6, ffs. 135-146v. (ポルトガル語), ffs.147-163v. (イタリア語).

⁹ 註7, 213v-214v.

¹⁰ ARSI, JapSin 6, ffs. 248-251v. (ポルトガル語)

¹¹ ARSI, JapSin 6, ffs. 289-292v. (ポルトガル語). 別写本同ffs. 293-296v. (ポルトガル語).

¹² ARSI, JapSin7-I, ffs. 70-71v. (ポルトガル語).

¹³ ポルトガル語 JapSin7-1, ffs. 108-108v./JapSin7-2, 109-110v./JapSin 7-3, 104-105v. イタリア語JapSin 7-3, 106-107.

るがその内容を紹介していくことにした。この書翰の中で最も興味を引く箇所は、天草の布教開始後まもなく、イエズス会を離脱した日本人の通詞が天草のキリシタンに「新しい教え」を説き始め、天草キリシタンの大半が教会を離れて、その日本人通詞に帰依してしまったという「不都合な事実」が赤裸々に語られることであろう¹⁴。

【書翰訳文】

イエス、マリア、キリストにおいて大いに尊敬すべき方、パードレよ。

至聖なる方の恩寵が、尊師の魂のうちに継続して宿らんことを。アーメン。

尊師方は皆、この土地に関する新しい情報を知りたいと望んでいることを承知しておりますので、簡潔にはありませんが、この書翰においてそれらをあなた方にお知らせすることにいたしました。我等の主イエス・キリストの大いなる御旨により、当地のキリスト教は大いに振興しており、それはパードレ・フランシスコ・カブラルに拠るところが少なくありません。というのも、この主の葡萄畑において手を休めることはできない中であって、その来訪により我等は皆大いに慰められ、助けられたからです。このような牧者を目の当たりにして、私はデウスに対し、当地に彼を長年とどめ給うことを願っております。というのも、土地のことが理解され始め、何をどのように対処すべきか、ようやく分かり始めたところであるからです。[パードレ・カブラルが]いなければ、彼が実行したように、今あるような全キリスト教界を6年間のうちに（○カブラルの当初の任期を指すか。）この日本で一致して作り上げるに至るなど不可能なことですし、当地においてデウスに仕えることに対する熱意や希望を如何に彼が授けたかは特筆すべきことです。三年や四年おきにインドから誰かが我々のところへやってきて、上長が交代するなどというのは、大変不都合な事であると私には思われます。しかしながら、これは現在の私の見解であり、時間が経てば、別の状況になることもありえます。

日本のあらゆる地域に関して、とりわけ、パードレ・フランシスコ・カブラルが少し前にそこから戻ってきたミヤコからは良い知らせがあります。彼が話すところでは、もし働き手がいれば、そこでは大いに成果が挙がるであろうとのこと。それはすべて我々次第です。

平戸と五島に関しても同様の知らせがあり、キリスト教徒達は信仰を堅持しておりますが、彼等の港にポルトガル船が来ないことにより、異教徒の間では成果が挙がらずにあります。

豊後では、常にキリスト教徒の間でも、異教徒の間でも成果が挙がっておりますが、それは緩慢です。博多では道が開かれ始め、その地の住民たちはデウスの教えを聴聞することを望んでおります。しかしながら、[ミヤコへの]巡回を終えたばかりのパードレ・フランシスコ・カブラルが行かないのであれば、今のところその地へ救済に行くことができる者はいないように思われます。その地では一人の裕福なキリスト教徒（○末次興膳。）が美しい教会を造作し、キリスト教徒は皆、救いを待ち望んでおります。たとえ何処かから通訳を省くことになるとしても、デウスがその地にパードレ〔・カブラル〕を導き給わんことを。というのも、彼には他の地域に欠損を生じさせずに、自分と共に連れていく通訳がないからです。

ドン・バルトロメオ（○大村純忠。）の土地は、現在のところ当地では最もキリスト教が栄え

¹⁴ 日本人宣教師とヨーロッパ人宣教師の確執は次の拙稿に詳しい。岡美穂子「僧形の宣教師」齋藤晃編『宣教と適応』名古屋大学出版会、2021年。

ている場所で、今や洗礼を授からないという武将は一人もおらず、彼等がキリスト教徒になるとその領民もすぐにそうなるという様で、説教を聞き終えるとすぐさま洗礼を授かることが可能になっています。キリスト教徒の増大は多くの場所に及び、あまたの仕事をこなすことができる働き手がないために、非常に多くの時間がかかります。

本年口之津では周辺の村々で成果が挙がり始め、多くの異教徒が改宗しつつあります。この地もまた働き手が大いに不足しております。というのも、一人のパードレと人々が望む時に説教する通訳が一人いるだけだからです。

高原では、デウスのご加護により、今後しばらくの間成果が挙がり続けるでしょう。なぜならパードレ・バルタザール・ロペスが乗って行ったポルトガル船が一隻到着したことにより、その地の領主が大いに満足しているからです。〔パードレ・ロペスは〕その土地の領主とすべてのキリスト教徒たちから大いに歓迎されました。〔パードレ・ロペス〕は彼が居住する口之津へ戻り、彼がその地に滞在することで、七年以上も我々が待ち望んでいたように、道が開かれることでしょう。

イルマンのミゲル・ヴァスが居住する志岐は、常に何某かの成果が挙がっております。しかしながら、その土地の領主（○志岐鎮経。）がデウスの教えの敵であることにより、〔改宗は〕緩慢です。

領主がキリスト教徒であることが理由で私が居住する天草は、異教徒の間で大いに成果が挙がっております。クリスマス以来今まで、700人以上が改宗し、教会は18ほどあります。これらの教会全ては、私が半分病人であることにより、不完全なイルマンによって維持されています。しかしながら我等の主なるキリストは、私が今や重大な仕事をするのをできないことはご存じです。なぜなら、ここには私を助けてくれる者は誰もいないからです。というのも、以前私を補助し通訳として仕えていた日本人がおり、この者は理解に優れ、修院にあること4年でしたので、大変熱心にパードレ・フランシスコ・カブラルに許可を乞い、パードレは彼にそれを与えました。一度暇乞いした後、彼は天草のこの地に戻って来ました。彼は1500人以上にも及ぶ当地のキリスト教徒たちを唆し、彼らは彼を奉じてその説教を望み、教会のことは意に介そうとしませませんでした。私はすぐにそれに対応し、この土地の領主であるドン・ミゲルの賛同を得て、彼を追放しました。しかしながら彼は確実に多くの支障を残しました。彼は8日間ほど貧しいキリスト教徒たちの間で呪われた説教をして回ったため、私は今もなお、彼等に教会の愛へと立ち返るように説教をし、助言を与えながら歩き回っております。この敵は志岐へと立ち去り、その土地の領主の厚誼を得ました。イルマンのミゲル・ヴァスがその地を不在にしていることもあり、キリスト教徒達に何らかの悪事を働く恐れがあり、書状によって当地から彼に注意を送りました。我等の主なるキリストが、キリスト教徒達が堅固であるよう嘉し給わんことを。

日本人の通訳達に関して、彼等が徳において不安定であるという点で、私は彼等に何の希望も持っておりません。もし尊師が日本において、多くの成果をお望みになるのであれば、それが可能となるような働き手をお送りください。彼等が到来しないうちは、状況は緩慢にしか進展しないでしょう。これ以上は書きません。どうかご加護を。尊師にはその聖にして献身的な犠牲において、私のことを思い起こしてくださいませよう。

天草より。本日1572年10月5日。

【 書翰原文 】

Ihesus Maria.¹⁵

Muito Reverendo em Christo, Padre.

Pax Christi.

A graça de supremo sancto faça continua morada na alma de Vossa Reverencia, Amen.

Porque sei que de todos deseja V.R. saber novas desta terra, determinei de lhas dar nesta, ainda que brevemente pola immensa bondade de Christo Nosso Senhor vai esta Christandade em muito aumento, de que não tem pouco merecimento o Padre Francisco Cabral, porque com suas vizitações nos anima a todos e ajuda de maneira que não podemos deixar de trabalhar na vinha do Senhor. Vendo tal pastor o qual, rogo a Deus que no-lo deixe estar cá por muitos annos, porque agora começa a entemder a terra e a saber por omde [h]a de emtrar e sair, cousa que senão pode alcançar em Japão em seis annos comcorrer a toda Christandade feita como ele fez, cousa que lhe deu muito lume e desejos de servir a Deus nesta terra. E nela acabar, e certo me parece gramde inconveniente mudar-se o Superior de Japão com termos quem nos visite da Índia cada três e quatro annos, mas eu digo o que me parece ao presente e pode ser que a esperiencia mostra-se outra cousa.

De todos os lugares de Japão temos boas novas, especialmente de Meaco donde o Padre Francisco Cabral veio [h]a pouco e diz que se [h]ouver obreiros que se fará lá muito fruto e assí o temos todos pera nos.

De Firando e do Gotto são humas mesmas novas as quais são comservaren-se os Christãos sem se fazer fruto nos gentios por causa de não terem navios nos seus portos.

Em Bungo sempre se faz fruto asi nos Christãos como nos gentios mas devagar. No Facata se começa abrir caminho e os moradores delle desejão muito de ouvir a ley de Deus, mas não vejo quem ao presente lá possa ir salvo se for o Padre Francisco Cabral por acabar agora a sua vizitação. Fez lá [h]um Christão rico huma fermoza igreja e todos os Christãos estão esperando socorro, prazerá a Deus irá-lá o Padre aimda que tome hum jurubasa d' algum lugar porque o não tem pera poder levar consigo sem fazer ninguna em outra parte.

A terra de Dom Bertolomeu he agora a quem cá florese na Christandade ja não ha senhor nenhum que não seja bautizado de maneira que ja senão anda senão pola gente popular. Mas esta pera acabar de ouvir pregação pera se poderem bautizar, averá mister muito tempo por serem muitos lugares e estes espalhados, e não haver obreiros que possão aqudir a tanta obra.

Em Quchinoccu, se começou este anno a fazer o fruto polas arabaldes e vão se convertendo muitos gentios. Este lugar está tambem muita falta de obreiros, porque não tem mais que hum Padre e hum jurubasa que prega quando querem.

¹⁵ ARSI, JapSin 7-I, fls.108-108v.

Em Simaobara, me parece com ajuda de Deus que daqui por diante se começará a fazer fruto, porque o senhor dele está contente porque lhe foy lá hum navio o Padre Baltezar Lopez foy lá, e foy muito bem recebido do senhor da terra e de todos os Christãos, e tornou-se pera Quchinoccu domde reside com lhe ficar hum caminho aberto, cousa que ha mais de sete anos desejamos.

Xiqui omde reside o Irmão Miguel Vaz sempre se faz algum fruto, mas está devagar por causa do senhor ser inimigo da ley de Deus.

Amaqusa que he omde eu resido porque o senhor da terra Christão, se tem feito muito fruto nos gentios. E Christãos de Natal pera cá batizando pasamte de setesentas almas, averá 18 igrejas e todas estas se cultivão com meio Irmão por causa de minhas doenças, mas sabe Christo Nosso Senhor que ja não posso com tamanha carga, porque não tenho ninguem que me ajude, porque hum japão que me ajudava e servia de jurubasa que era o que mais entendia e avia quatro anos que estava em casa pidio muito afincadamente ao Padre Francisco Cabral que lhe desse licença, o Padre lha deu, e depois de despedido tornou a esta terra d'Amaqusa e a motivou mais de mil e quinhentos Christãos, os quais determinavão de o sustentar, e que lhes pregasse e que não querião ter conta com a igreja, acodi logo a iso e com o favor de Dom Miguel que he o senhor da terra, o fiz lançar fora, mas deixou certo tantas avalias. Em obra de 8 dias nos pobres Christãos com suas malditas palavras, que ainda agora amdo com pregações e conselhos pera os tornar ao amor da igreja. Este inimigo se foi pera ho Xiqui e tomou amizade com ho senhor da terra e por ho Irmão Migel Vaz não estar na terra e medo que faça algum mal aos Christãos, mas de cá o avizamos com cartas, prazerá a Christo Nosso Senhor, que estarão fortes.

Nenhuma esperança tenho em jurubasas japois por serem muito inconstantes no bem. E por tanto se V.R. deseja muito fruto em Japão, mande obreiros com que se faça, e em mentes não vierem, irá a cousa muito devagar. Não me alargo mais. Salvo rogar muito a V.R. se lembre de mim em seus sanctos e devotos sacrificios.

D'Amaqusa oje 5 de outubro de 1572.